ナミビア・ヘレロの祖先観念と
伝統的権威の祖先の土地返還運動に関する人類学的研究

国立民族学博物館　　外来研究員（助成時）
日本学術振興会　海外特別研究員（現　在）

宮本　佳和

１．要約

本研究は、遊動民への定住化政策を契機に生じる、先住権などのマクロで普遍的なイメージで捉えられやすい問題群を、ミクロな出来事の集積からなる人類学的フィールド調査で得た枠組みで再解釈する。具体的には、南部アフリカのナミビア共和国に暮らすヘレロ語話者の人びと（以下、ヘレロ）の祖先観念に着目し、地域住民および彼らと国家を仲介する伝統的権威の「祖先の土地」に関する認識の差異を検討する。以上を通して、現在伝統的権威が活発におこなう「祖先の土地」返還運動の背後にあるはずの、ヘレロ内部の祖先に関する世界観の多様性を明らかにし、土地改革を進める近代国家が直面する慣習的土地権や先住権などの法制度をめぐる問題を、地域住民と伝統的権威の双方の視点から再解釈する。

２．研究の目的と背景

本研究の目的は、ナミビアに暮らすヘレロの祖先観念に着目し、地域住民および彼らと国家を仲介する伝統的権威の「祖先の土地」に関する認識の差異を検討することである。

- 「祖先の土地」についての背景

ヘレロは、20 世紀初頭のドイツによるジェノサイド（1904-1908 年）の被害者として知られる。当時ヘレロが居住し、放牧に適した土地は奪われ、生き残った者は牧草の状態の悪い地域に定住させられた。その頃の最高首長を始祖とするヘレロの伝統的権威が、近年ナミビア政府が土地改革を推し進める状況に対して異を唱え、「祖先の土地」返還運動を主導している。政府与党を構成し、さらに国民の多数を占めるのは、ドイツ植民地期に被害が少なかった民族であり、自らの民族に都合よく采配を振るうことに対して不満を募らせているのである。その背後には、ジェノサイドの直接の被害者の子孫の意見を無視したまま進められる、賠償・補償問題や遺骨返還をめぐる国家間交渉への不満が含まれている。

- これまでのフィールド調査から明らかになった「聖なる場所」

報告者は 2015 年からナミビア北西部でヘレロと一緒に暮らしながら参与観察する中で、外部者による襲撃によって多くの人が暴力的に殺された場所には禁忌が存在し、祖先への畏怖の観念があることを発見した。こうした禁忌のある場所は「聖なる場所（*otjirongo tjizera*）」と呼ばれており、ジェノサイドが中心的に行われた中央部にも点在していることが判明した。

３．研究の項目と内容

新型コロナウイルス感染拡大の影響により、調査地域への渡航制限解消が見込めなかったため、当初予定していたフィールド調査を中止した。それに伴い、オンライン調査と国内における文献調査に変更した。

調査対象者に関しては、(1) インタビュー予定だった最高首長をはじめ、ヘレロの伝統的権威（2021 年現在、10 党派）の首長らの多くが新型コロナウイルスに罹患し、年度前半にかけて相次いで急逝したため、そして（2）現地におけるネット環境が整っていないため、当初の予定よりも対象を絞った計画に変更した。インフォーマントは、①伝統的権威の中でも継承問題の混乱の少ない党派関係者と、②ヘレロが冠婚葬祭などの儀礼をおこなう際に祭祀を司る者である。オンライン調査は、現地調査協力者と調整しながら、国内電波あるいはインターネット環境が整っている場所を確保し、その場所にインフォーマントを連れて来てもらい、ビデオ通話あるいは音声通話で記録しながらインタビューを実施した。

４．研究の成果と今後の課題

ナミビア中央部のオチョゾンデュパ県オカカララと、北西部のクネネ県オプウォをベースに、合計 13 名のインフォーマントにオンラインインタビューを実施した。その結果、「祖先の土地」返還運動の文脈において用いる「祖先」は、父系リニイジを単位として諸儀礼をおこなう際に使用する道具（父系クランごとの禁忌と関係する）、もしくはその道具が保管されている小屋を指している可能性が高いことが判明した。この点に関しては、伝統的権威の関係者であるかどうか、「祖先の土地」問題に関心があるかどうかに関わらず、差異はないということも明らかになった。以上を完了報告時点での暫定的な結論として提示した。

現地調査協力者の尽力によってオンライン調査が可能になったが、オンラインでは聞き取り対象者だけでなく内容においても限界があった。ヘレロは、重要な事柄であればあるほど一対一の対面での会話を好む人たちである。そのため、今回のオンラインでの会話は、現地の文脈に照らせば特殊な状況である。文化人類学においてフィールド調査が重要であることはこれまでの研究でも理解していたが、今回の調査を経て、あらためて物理的な移動を伴うフィールド調査の必要性を痛感した。特に、本研究課題が中心的に扱う祖先についての内容は、人びとと実際に生活をともにしながら築いていく人間関係があってこそ、話をしてくれたり、経験を共有してくれたりする。このことに気づけたのも、オンライン調査の収穫の一つであった。

今後は、これまでの研究で拠点にしてこなかった中央部に範囲を広げて人間関係を築きながらフィールド調査を実施し、提示した暫定的な結論を補強・修正して、分析を深めることが課題である。成果は日本語や英語だけでなく、将来的には現地語（ヘレロ語）での執筆・出版を計画しているため、今回データベース化した一次資料はその一部になる予定である。

最後に、計画変更に柔軟にご対応くださり、本研究課題の遂行を可能にしてくださった、日本科学協会のみなさまに心より深くお礼申し上げます。